

個人レポート

藤原清輔の述懐歌

大 島 法 子

一 はじめに

藤原清輔（一一〇四～一二七七）は平安時代後期の歌人であり、研究史上では主に歌学者としての実績が評価されている。しかし、清輔は和歌集の編纂や歌合の主催など積極的な和歌活動によって、歌人としても十分に評価できる功績を残している。

すぐれた歌人、歌学者として活動する一方で、清輔の生涯は、不遇なものであった。父の藤原顕輔との不仲や、信任を得ていた二条天皇の崩御といった事柄が影響し、官位昇進はかばかしくなく、最終的に正四位下皇太后宮大進の位にとどまった。そして、清輔が抱えていたその不遇感は、述懐歌という形で歌に表れた。

そもそも述懐歌の定義付けとして、『和歌大辞典』が、不遇沈淪への焦燥、老いへの嘆き、無常への嘆き、述懐の気分象徴化に分類できる歌を示すほか、木村尚志氏が、自身の否定的状況を詠み込むことで願望を表現する歌を挙げている^①。また、述懐歌の歴史については内田徹氏の論に詳しいが、「述懐」という語の初出である『万葉集』時代には「思いを述べる」という広義の意味を持っていて、大江千里の『句題和歌』以降、嘆きの要素を持つ歌に限定されたという^②。その後は私家集の中で述

懐歌が定着し始めるものの、長らく公の場にはふさわしくない歌とされてきた。『堀河百首』で述懐が歌題として用いられてから、源俊賴や藤原俊成らがそれぞれ述懐歌に特化した百首歌である『述懐百首』を詠作したほか、源顕仲が歌合の場で述懐歌を繰り返し詠んだことも功を奏し、徐々に公の場で認められるようになり、中世期における地位を確立することとなった。

清輔は、この述懐歌が私的な歌から公的な歌へと変わりつつあった時代にいた。歌人としての活動の中で数多く述懐歌を詠み、また詳細こそ不明なもの、清輔も『述懐百首』を詠作していたことが分かっており、述懐歌と清輔は決して無関係ではないと言える。本稿では、清輔がどのような背景や意図を持ち述懐歌を詠んでいたのか、そしてその述懐歌の特徴はどのようなものかを考察していく。

二 清輔の述懐歌詠作にまつわる背景

清輔は『清輔集』に収録された歌を中心として、数多くの述懐歌を残したが、その背景には何があったのだろうか。

藤原顕季を祖とする歌道家、六条藤家に生まれた清輔は、父に顕輔、母に高階能遠女を持つ。同母兄の顕方と共に官位は低く、異母弟の重家

らに後れをとっていたとされている。長らく不遇な生活を送り、四八歳の折によりやく従五位上となり、その後も正四位下皇太后宮大進の役職にとどまった。

清輔の生まれた六条藤家は、歌の家として知られていた。その成り立ちは井上宗雄氏や竹下豊氏の研究に詳しいが、白河院の乳母子かつ院近臣であった顕季が、院との関係や勅撰集に入集した先代隆経の功績を利用し、和歌によって政治基盤を作り上げようとしたことに始まるという³。顕季の築いた地位はその後顕輔へと受け継がれ、さらには顕輔の『詞花集』編纂の功績により、六条藤家は歌壇の中心的存在となったとされる。

しかし、そのような華々しい家柄とはうらはらに、清輔の官途は不遇なものであった。清輔は父である顕輔と不仲であったことが影響し、後ろ盾を得ることができなかった。『詞花集』編纂の折に顕輔と不仲であったことが著書『袋草紙』にも記されている⁴。

さらに、清輔は周囲から博学ぶりを評価され、二条天皇からも信任を得た一方で、勅撰集になることを目論んで清輔が編纂作業を進めていた『統詞花和歌集』が、天皇の崩御により勅撰集にならないという不運な出来事にも見舞われた。また、清輔の歌学に対する自信とそれに由来する頑固さが『無名抄』では「偏頗ある判者」と評され、気難しい一面を垣間見せている⁵。晩年こそ、歌人として恵まれた環境に身を置いたとされるものの、その生涯の大半は不遇感の漂うものだった。

以上のような経歴を持つ清輔であるが、述懐歌を詠んだ背景には、先述した六条藤家の存在と不遇感があると考えられる。すなわち、清輔は六条藤家という歌の家に生まれ、恵まれた才能を持ちながらも、それらが官職に反映されないことへ不満を持っており、その嘆きが和歌へ表れ

ているということである。実際に『袋草紙』には、勅撰集に代々入集するという偉業が清輔の代で途絶えてしまったことを、次のように記している。

予、金葉・詞花両度の撰に、千載一遇に逢ひて、空しく過ごし了んぬ。遺恨の第一なり。(中略) 四代の箕裘、予の時に至りてこれを闕けり。遺恨なり。

清輔はこの出来事を、「遺恨」という語を用いて表現し、感情を露にしている⁶。また、『袋草紙』には、天皇へ訴嘆した結果昇進が叶った話や、和歌の知識によって相手を論破した話などが記され、昇進への思いと歌学に対する自負が感じられるのである⁷。こうしたことから、清輔の抱えた不遇感は、家柄や才能に見合わない現状への不満によるものと考えられるだろう。

三 清輔の述懐歌

清輔の家集である『清輔集』には、四四四首（うち自詠は四二六首）の和歌が収録されており、述懐歌は約六〇首前後存在する⁸。これらの述懐歌のうち、特に「不遇」、「嘆老」、「出家」という観点から考察したい。なお、以下に挙げる清輔の歌はすべて『清輔集』所収の歌である⁹。

A 不遇にまつわる述懐歌

清輔の述懐歌の中でも特徴的なものが、天皇へ申文の形をとった歌や、宮中の人物へ贈った不遇を訴える歌である。先述したように、六条藤家は顕季が白河院との密接な関係によって築いた政治基盤を持っており、

天皇家とのつながりは多かったと言える。官途不遇であった清輔は、それを利用する形で、度々天皇やその周辺人物へ述懐歌を贈っていた。^⑩その様子は『清輔集』の詞書や、『袋草紙』に記された話からも知ることができる。清輔の不遇歌には以下のようなものがある。

一七 梅

梅の花おなじねよりは生ひながらいかなるえだの咲きおくるらん

四二〇 四位申したるをゆるされざりければ、おととどもも四位にて待るに、いまだゆるされぬよしなど申文に書きて奉るとて、やへ／＼の人だにのほくらゐ山老いぬるみにはくるしかりけりこのたびなむゆるされける

一七番歌について、『袋草紙』には次のように記されている。^⑪

愚詠の百首の歌、(本歌省略)と云ふ歌を、故北の政所哀れましめ給ひて、朝観の行幸の御給にて五位従上に叙せらる。

同様に、四二〇番歌についても次のような記述がある。^⑫

予、先蹤を追つて、叙位の時、故鳥羽院の申文に引く歌、(本歌省略)これ募り申す事有るも、四位に度々漏れし。昆弟等は四品に至れるに、聴しなき事を思ひて詠ずる所なり。賢く御感有りて、その後四品に叙せらる。

『袋草紙』のこれらの記述から、一七番歌が関白忠通室宗子に、四二〇番歌が鳥羽天皇に認められたことで、それぞれ従五位上と四位に叙せられたことが分かる。

清輔が述懐歌を贈る行為は『清輔集』にも数多く見られ、清輔にとって述懐歌による訴嘆というものが昇進のためはかなり重要な位置を占めていたことが推測できる。

また、この二首に共通していることとして、清輔が兄弟との格差を訴えていることが挙げられる。一七番歌では梅の花を自身に例え、同じ根から生えた兄弟よりも官位に後れをとっていることを嘆いている。同様に四二〇番歌では、詞書の中で弟たちがすでに四位に叙せられているが自分は未だ四位にならないことを述べている。「やへ／＼の人」は遥かに年下の弟たちという意でとられ、弟たちはすでに「くらゐ山」に登ったが、老いた我が身ではその山を登るのが苦しいので、昇進させてほしいという思いが込められている。兄弟間の格差を嘆き昇進を求める姿勢は、先述した清輔の家柄と才能にそぐわない官職への不満や嘆きが表れていると考えられる。清輔の不遇歌には、家の意識と不遇感が色濃く表れていると言つて良いだろう。

B 老いにまつわる述懐歌

清輔の嘆老歌は、主に老いた我が身への嘆きや残りの人生の短さを詠んだものが多いが、芦田耕一氏は清輔の嘆老歌と不遇感の関連について指摘している。^⑬

三七〇 述懐

夢のうちにいそぢの春は過ぎにけり
今行末はよひの稲妻

二二五 除夜

はかなくてことしもけふになりにけりあはれにつもるわが齢かな

三七〇番歌では、はかないものの例えである「よひの稲妻」という語を用いて余生の短さを、「夢のうちに」という語を用いて五〇歳の春があつという間に過ぎたことへの感慨をそれぞれ表している。そして、二二五番歌では、「はかなく」一年が終わり、自身の年がしみじみと悲しく積もっていく様子が描かれている。この二首に共通する「過ぎ去ってしまった時間」への思いと「年や人生のはかなさ」の根本には、清輔の不遇感が存在しているとは考えられないだろうか。次の歌を参考にしたい。

一七四 九月九日にきくのさかざりければ、

花さかで老いぬる人のまがきには菊さへ時にあはぬなりけり

芦田氏が不遇歌として分類しているこの歌は、「老いぬる人」の家の離には菊さえ咲かないという嘆きを詠んでいる。不遇な身の上の自身を「老いぬる人」と表現していることから、清輔が老いてもなお我が身が不遇であったという意識を持っていたことが推測される。このことから、清輔の嘆老歌には、単に老いた自身を嘆くという趣向だけではなく、年老いても不遇であるという意識がこめられていると考えられる。

Ｃ出家にまつわる述懐歌

清輔は出家に関する述懐歌をいくつか詠んでいるが、実際に出家はし

ていない。それはなぜなのだろうか。

次の和歌は、『清輔集』の「述懐百首のうちに、」という詞書のもとに詠まれた歌である。

三八九 いしぶみやつがろのをちにありときくえぞ世の中をおもひはなれぬ

三九〇 たちがたきおもひのつなにもとはれて引きかへさるゝことぞかなしき

三九三 よも山もながめてのみもくらすかないづれのみねにいらんとすらん

三九三番歌では、「山」「みね」という語を用いて隠遁生活を想起させている。詠作主体は山を眺めながら、自分はどの峰に入山するのかと思いを馳せている。一方、三八九、三九〇番歌では、「おもひはなれぬ」、「たちがたき」という語を用い俗世に対する未練を表している。三八九番歌は、津軽から離れた蝦夷の地のように世の中から心を離すことができないと詠んでいる。そして、三九〇番歌は思いの綱がまとわりついて、結局元へ戻ってしまう悲しみを詠んでいるが、これは出家しようと思っても俗世への未練が自身を引き戻してしまい、出家できずにいることを投影したものだろう。この三首から、清輔の出家に関する述懐歌は、一方で厭世感を詠む歌があるものの、それとは矛盾した俗世への執着を表す歌もあるということが分かる。これは一体なぜなのだろうか。

山本一氏は、不遇感と出家を関連付け、不遇感が俗世への絶望と逃避

の願いに深化すると仏教信仰へ傾倒するが、官途への望み、俗世への執着があるうちはそこに軋轢が生じることを指摘している⁽⁴⁾。つまり、不遇意識には執着と厭世の二面性があるのだと述べている。また、山本氏は当時の貴族の出家の背景には、死の切迫や近親者の死が関わっていることを指摘している。

この指摘から、清輔が出家に至らなかった背景には、執着と厭世の二面性が認められるほか、近親者の死という切迫した状況になかったことが考えられるのではないか。厭世感に包まれた述懐歌を詠みながらも、同時に俗世への断ち切れない未練を詠み込む清輔の姿勢は、山本氏の指摘する二面性に他ならない。清輔の置かれていた環境は、確かに出家を必要としないものであったが、それ以上に世を厭いながら官職に執着し続ける清輔の思いが出家に対するリアティーを希薄なものにしているのではないかと考えられる。

このような要因から、清輔の出家にまつわる述懐歌は不遇感を内包し、出家への意思が薄いという特徴を持ったものであると考えられる。

四 おわりに

ここまで清輔が述懐歌を詠んだ背景及びその述懐歌の特徴を考察してきたが、不遇・嘆老・出家のいずれの述懐歌も、清輔の不遇意識と関連があることが分かった。歌人として、また歌学者としてもすぐれた才能を持ち、六条藤家という歌道家を担う存在であった清輔だが、それに見合わない官職への不満や嘆きは並々ならぬものであったことが推測できるであろう。清輔は、述懐歌が私的なものから公のものへと移り変わる転換期におり、述懐歌の歴史の中で果たした役割は少なくないと考えられる。

本稿では述懐歌に限定しての考察であったが、これらの歌だけでも清輔の歌人としての一面を明らかにできたように思われる。清輔は、家の意識と不遇感を取り巻く中で、すぐれた述懐歌を数多く生み出した。これらの歌だけでも、清輔は決して歌学者としてだけでなく、歌人としての功績にも目を向ける価値がある人物と言って良いだろう。

注

- (1) 犬養廉ほか編『和歌大辞典』（明治書院 一九八六年）
- 木村尚志『述懐歌の人称と視点』（『第三三回国際日本文学研究集会会議録』二〇一〇年 三月）
- (2) 内田徹『述懐歌の形成』（『文芸と批評』第六巻第五号 一九八七年三月）
- (3) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院 一九七八年）
- 竹下豊「六条藤家をめぐって―歌道家の成立と展開」『女子大文学 国文篇』第三〇号 一九七九年 三月
- (4) 『詞花集』編纂に際しての父顕輔との不仲は『袋草紙』六二段に記されている。
- (5) 鴨長明『無名抄』の「俊成・清輔の歌の判、偏頗あること」では清輔の頑固な性格が浮き彫りになっている。
- (6) 藤岡忠美校注『袋草紙』（『新日本古典文学大系 二九』岩波書店 一九九五年）
- (7) 清輔昇進の話は『袋草紙』一〇〇段、藤原範兼と藤原俊成を論破した「このもの」論争は一二二段に記されている。
- (8) 述懐歌の数については芦田耕一氏の解釈をもとに独自に集計した。解釈によって過不足が生じる点についてはご了承ください。
- (9) 芦田耕一『清輔集新注』（青簡舎 二〇〇八年）

(10) 清輔は崇徳天皇、鳥羽天皇、二条天皇へ別の時期にそれぞれ述懐歌を贈っている。また『清輔集』には、信西や源頼政、宮中の女房らとの交流が認められ、述懐歌のやりとりが記されている。

(11) ⑥に同じ

(12) ⑥に同じ

(13) ⑨に同じ

(14) 山本一「俊成「述懐百首」への一視角」(神戸大学『国文学研究ノート』第六号 一九七五年十一月)

参考文献

芦田耕一『清輔集新注』(青簡舎 二〇〇八年)

藤岡忠美校注『袋草紙』(『新日本古典文学大系 二九』 岩波書店 一九九五年)

藤岡忠美ほか『袋草紙考証 雑談篇』(和泉書院 一九九一年)

鴨長明 久保田淳訳注『無名抄』(角川文庫 二〇一三年)

犬養廉ほか編『和歌大辞典』(明治書院 一九八六年)

中村幸彦ほか編『角川古語大辞典』(角川書店 一九八二年)

木村尚志『述懐歌の人称と視点』(第三三回国際日本文学研究会会議録 二〇一〇年 三月)

内田徹『述懐歌の形成』(『文芸と批評』第六卷第五号 一九八七年 三月)

井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』(笠間書院 一九七八年)

竹下豊「六条藤家をめぐって―歌道家の成立と展開」(『女子大文学 国文篇』第三〇号 一九七九年 三月)

芦田耕一「清輔の述懐歌―出家と関わって―」(『六条藤家清輔の研究』和泉書院 二〇〇四年)

山本一「俊成「述懐百首」への一視角」(神戸大学『国文学研究ノート』第六号 一九七五年十一月)